實相寺花園会報　第207号

令和8年7月1日発行　発行所　臨済宗妙心寺派　實相寺・實相寺花園会
〒761-0450　高松市三谷町1811番地1　℡087-889-3838 編集発行人 山本 文匡　https://www.jissouji.net

住職近況

平成30年8月より、2期8年に渉って妙心寺派宗議会議員を務めて参りましたが、今年8月よりは高松市の霊源寺様が議員にご就任されることになりましたので、ご報告申し上げます。

不肖、昨今の社会情勢を鑑み、教団の改革に尽力してきましたが、今後は實相寺の行く末を見据えながら、次代への準備を進めて行きたいと思います。宜しくお願いします。

6月29日（月）の産経新聞1面「朝の詩」というコーナーに、下記のような詩が投稿されていました。実に素晴らしい情景ですが、私がこの詩を読んで素直に感じたのは、「お孫さんが偉いんじゃないですよ。孫にそういう教育の出来る子供を育てた武田博幸さん、貴方が偉いんですよ」ということでした。

以前にもご紹介しましたが、令和5年版『高齢社会白書』によれば、3世代同居は65歳以上世帯のわずか1割です。つまり殆どの年寄りは子や孫と一緒に暮らしていないし、親の面倒を見ている夫婦も殆どいないのです。日本はいつからこうなったのですかね？

この詩を読むと、２階で「そろそろじいじ、ばあばにご挨拶しておいで」と孫を促すお嫁さんの姿が目に浮かびます。一緒に暮らしていれば、お互いに気を遣ったり、色々と面倒なことも多いとは思いますが、一緒に暮らしているからこそ、家族になっていくのだと思います。

勿論、それぞれに事情はあるのでしょうが、「何とも羨ましい話だな」と思ってご紹介しました。

朝の詩（うた）

福岡県朝倉市　武田　博幸　74

就寝前

いつに始まったことか
寝る前に6歳の孫は
じじばばのもとに来て
「今日も一日ありがと
うございました。明日
もよろしくお願いしま
す」と朗らかに言う。
「あなたのおかげで楽
しい一日ありがとう」
とじじばばは返し
孫に頭を下げる。
階段の上から
「おやすみ」の
元気な声が聞こえる。

（選者　八木幹夫）

「小水（しょうすい）の魚（うお）に楽しみ有り」⑦
「今ここを生きる幸せ」

　色々と述べてきましたが、結局のところ「小水の魚の楽しみ」とは「自尊心を持つこと」です。生活信条では「人間の尊さに目覚め」と言ってますが、端的に言えば「自分には価値がある。人生には意味がある」と思える人は、幾つになっても幸福でしょう。

　勿論それは独りよがりな傲慢さとは無縁です。また他人と優劣を比較するような幸福でもありません。要は自分が今、生きていること、生かされていることに感謝出来るか否かです。

　思い通りにならない人生だからこそ、発想の転換が必要です。星野富弘さんのいう「いのちより大切なもの」とは、換言すれば「自分より大切なもの」です。古来、人は自分より大きな存在と繋がることによって、限りある人生に意味を見出してきました。仕事であれ、家族であれ、何であれ「自分を犠牲にしても良い」と思えるものを見つけられた人は幸福でしょう。

　かつては「家業」を継いで生きることはあたり前でしたし、高度成長期は「会社」の為に働くことに意義を感じられたかもしれません。判り易い人生の目的が割と身近にあった気がします。しかし令和の今、自らの人生を賭することが出来るような存在はなかなか見つかりません。だからこそ多くの人が、不本意な人生から逃れる為に、「自分らしさ」を探し求めているのではないでしょうか。

　禅僧として、そんな現代社会に申し上げたいのは、人生の意義とは「自らの役割を果たす」ことに尽きます。千利休が弟子に「茶の湯とはどのようなものか？」と問われ、「茶は服のよきように、炭は湯の沸わくように、夏は涼しく冬は暖かに、花は野にあるように云々」と答えたことは有名ですが、何事もあるべき様が大切です。あるべき自分であるならば、自ずから「自分らしさ」は現れてくると思うのです。

　最期に、仏教詩人 坂村真民さんの詩をご紹介します。

「生きていく力がなくなる時」

　死のうと思う日はないが
　生きてゆく力が
　なくなることがある
　そんな時　お寺を訪ね
　わたしは　ひとり
　仏陀の前に　座ってくる
　力わき明日を思うこころが
　出てくるまで
　坐ってくる